

表 6—3—18 15歳以上従業地・通学地別就業者・通学者数

年度	常 住 地	総 数			熊 野 町 内			熊 野 町 外			昼 間 人 口
		総数	就業者	通学者	総数	就業者	通学者	総数	就業者	通学者	
45	当 町	8,129	7,429	700	4,314	4,224	90	3,815	3,205	610	11,404
	他市町村	335	334	1	335	334	1	—	—	—	
50	当 町	9,666	8,735	931	4,529	4,319	210	5,137	4,416	721	15,925
	他市町村	458	455	3	458	455	3	—	—	—	
55	当 町	11,746	10,382	1,364	5,754	5,067	687	5,992	5,315	677	19,598
	他市町村	1,338	778	560	1,338	778	560	—	—	—	

昭和55年国勢調査

広島市内では、安芸区八六八、南区八四八などが多く、東区はやはり三七八と少ない。中区も三一人と少なく、安佐南・安佐北は少ない。

県外では、やはり首都圏が多く、東京二四、神奈川二五、近畿圏では、大阪一〇、兵庫二一で、転出の方が多い。

中国地方では、山口がもっとも多く、六四人、次いで岡山二一人、島根・鳥取は五人、四人と少ない。愛知県も七人と少ないが、四国では愛媛一〇人がもっとも多く、九州では転出と同様、福岡が二人ともっとも多い。

転出入とも、広島県・中国地方と、近距離ほど交流が深く、ラベンシュタインの法則が当てはまるが、遠距離では、首都圏・近畿圏など大都市圏との交流が深く、ラベンシュタインの法則は当てはまらない。

通勤・通学 通勤・通学は、日々の人口移動であるが、昭和五十五年（一九八〇）の状況をみると、熊野町は、熊野町に常住地

を有するものが、一万一七四六人で、熊野町に従業地・通学地を有するものが、七〇九二人、他市町村に行くもの五九九二人であり、他市町村に常住地を有する者で、熊野町に働らきに来たり、通学して来る者一三八名を差引くと、四六五四人の流出超過となる。したがって、昼間人口は一万九五八七人となり、昼間人口指数は八一で、マイナスである。

表6-3-19 15歳以上従業地・通学地・常住地別通勤・通学人口

区 分	常住人口	当町に就業・通学地を有するもの			当町に常住地を有するもの			差	昼間人口	昼間人口 指数
		総 数	当地に常 住するもの	他市町村 に常住す るもの	総 数	当地で従 業通学す るもの	他市町村で 従業通学す るもの			
安芸郡	一九九、二九六	八一、三六六	四四、四六七	三六、八四九	八七、二九二	四四、四六七	四二、八五五	△五、九七六	一六三、二六三	九六
府中町	四七、八二七	三、二五五	一〇、二八七	三、〇〇八	二四、五九八	一〇、二八七	一四、三一	七、六九七	五五、五四	二六
海田町	二九、九三四	一七、〇〇元	七、七九	九、一九〇	一五、六三	七、七九	七、九〇三	一、三八七	三二、二九八	一〇五
熊野町	二四、二五三	七、〇九二	五、七四四	一、三三八	二、七四六	五、七四四	五、九九二	△四、六五四	一九、五八七	八
坂町	一三、三五〇	三、三六	二、三四	一、〇四	六、八七	二、三四	四、五三	△三、四八九	九、八六一	七四
江田島町	一七、〇二二	八、三三	六、八四六	一、四八六	九、五九	六、八四六	二、六九三	△一、三三七	一五、七八八	九三
音戸町	一七、七〇二	五、七六	四、五八四	一、一八	八、八四八	四、五八四	四、二六四	△三、一三	一四、五五	八二
倉橋町	一〇、七七四	四、五九	四、一五	二九四	五、六九	四、二九五	一、三四四	△一、〇五〇	九、七三	九二
下蒲刈町	四、〇九一	一、二七	一、〇三	一四	一、九〇	一、〇三	九六七	△八五三	三、三六	九
蒲刈町	四、三五六	一、八〇八	一、六五	二三	二、四八三	一、六四	八八	△六七五	三、七九	八四

単位：人

昭和55年国勢調査

これを安芸郡下の他町村と比較すると、府中町は大工場を持つため、昼間人口一一六と流入超で、海田町も工場や郡の中心機能が多いため、一〇五と流入超である。しかし、他町村は、すべて流出超である。

この経年変化をみると、昭和四十五年・五十年・五十五年と人口増加にともなって、昼間人口も増加して来ているので、人口流出が多くなっていることはないようである。

二 土地利用

1 全体的土地利用

概要

熊野町の土地利用状況をみると、全体として山間盆地にあり、四囲を山に囲まれ、盆地底に田畑、集落、道路等が存在する。また、水系からみれば、二河川と熊野川の谷頭部、谷中分水点にあるため、水に乏しく、溜池が多い。

土地利用の現状をみると、昭和三十九年（一九六四）では山林が九三二・五ヘクタール、田畑九二・三ヘクタールで、田畑合わせて、五六七・六ヘクタールであった。宅地は、当時は七二・八ヘクタールで、比重は小さかった。

昭和五十年となると、田畑の面積は多少減ったようであるが、田畑山林が宅地へ転用され、宅地面積が一四一・二ヘクタールと、一〇年前に比べて二倍となった。昭和四十三年（一九六八）以前の団地開発が、その主たる要因であろう。また雑種地や原野が増えたのは、減反政策の結果であろう。また山林の増加は畑地が山林へ戻ったことも一因であろう。

昭和五十五年になると、田は三四七・六ヘクタールとなり、ますます減少して行き、畑は減少がやや止まったようである。山林はかなり増加し、その他が山林となって面積に加えられたものが多いのかも知れない。

宅地は、昭和五十五年以降、それ程急激な増加はみられない。

表 6—3—20 土地利用現況

地 目	昭 39	昭 45	昭 50	昭 54
田	475.3ha	450.0ha	405.0ha	350.2ha
畑	92.3	94.5	75.4	70.2
山林	932.5	890.4	1,059.0	1,046.9
宅地	72.8	105.7	141.2	177.5
雑種地	1.7	11.2	63.3	66.4
原野	39.6	55.0	54.0	84.0
池沼	0.6	0.7	0.6	1.0
その他	1,783.2	1,790.5	1,559.4	1,601.4

土地概要調査より

表 6—3—21 地目別面積

(単位: ha)

年次	総面積	田	畑	宅 地	池 沼	山 林	原 野	雑種地	その他
55	3,398.0	347.6	69.7	186.9	1.0	2,230.6	83.7	64.4	414.1
57	3,398.0	336.7	66.1	198.8	1.9	2,235.8	73.8	70.1	414.8
59	3,398.0	326.3	67.3	208.9	0.8	2,236.9	71.6	71.5	414.7

固定資産概要調査

昭和五十九年の最新の土地利用状況は、総面積三三九八・〇ヘクタール、そのうち山林が二二三六・九ヘクタールを占め、全体の六五・九%にも当たり、山間盆地の町としての性格をよく示している。田は三二六・三ヘクタールで、畑と合計しても三九三・六ヘクタールで、全体の一一・六%にすぎない。宅地は二〇八・九ヘクタールで、これも全体の六・一%にすぎない。しかし、平地部をかなり占めているので、全体としては、熊野町一帯で、かなり都市化が進んでいるように見える。

他町との比較

次にこれを安芸郡の他町村と比較すると、安芸郡全体では、山林面積の比は三六・四%で、かなり低いが、熊野町は郡下でもっとも山林面積が広い。熊野町に次ぐのは坂町で、約五〇%である。また田の面積が広く、郡下でもっとも多い。これに次ぐのは、音戸町の八・六%である。

第六章 現 代

表 6—3—22 地目別面積 (昭和61年1月1日)

区 分	総面積	田	畑	宅地	池沼	山林	原野	雑種地	その他
安芸郡	二〇、四三六・〇 (二〇、〇〇〇)	九八・〇 (四・六)	三、二九・一 (二・七)	一、六四四・〇 (八・一)	〇・四・三 (〇・〇)	七、二九九・二 (三・二)	六〇・三 (三・九)	二六・三 (一・三)	七、三三七・〇 (五・三)
府中町	一〇、〇七・〇 (一〇、〇〇〇)	一四・三 (一・四)	三・五・二 (三・四)	二六・五 (七・九)	〇・一・三 (〇・〇)	四・三・〇 (四・〇)	—	二・五・四 (二・四)	二五・九 (四・五)
海田町	一、五七・〇 (一〇、〇〇〇)	六・六 (四・八)	三・五・八 (三・七)	三・三・八 (六・四)	—	三・四・四 (二・五)	—	三・八 (二・五)	六・五・六 (四・一)
熊野町	三、三九八・〇 (一〇、〇〇〇)	三六・〇 (九・三)	六・五・一 (一・九)	二・八・三 (六・四)	〇・〇・六 (〇・〇)	二、三六・七 (六・五)	六・二・四 (一・九)	七・一・二 (二・二)	四・三・八 (三・四)
坂町	一、五五・〇 (一〇、〇〇〇)	四・九 (三・三)	一・三・九 (七・三)	一・〇・四 (二・四)	〇・〇 (〇・〇)	七・二・九 (四・八)	二・四 (〇・七)	四・九 (二・六)	三・九・七 (五・四)
江田島町	三、〇〇八・〇 (一〇、〇〇〇)	六・五 (二・三)	四・四・一 (四・七)	三・九・六 (三・三)	〇・〇・二 (〇・〇)	三・四・五 (一・五)	四・四・六 (六・四)	七・六 (二・二)	一、一八〇・〇 (四・六)
音戸町	一、八六九・〇 (一〇、〇〇〇)	六・五 (八・六)	二・四・四 (三・二)	一・七・八 (九・四)	—	四・八・〇 (三・五)	六・六 (〇・九)	五・九 (〇・九)	七・二・八 (四・三)
倉橋町	五、四三〇・〇 (一〇、〇〇〇)	三・六 (四・三)	六・六・三 (一・五)	三・三・〇 (三・二)	〇・二・三 (〇・〇)	一、九〇・九 (三・五)	六・一 (〇・三)	六・八 (〇・五)	二、五〇〇・〇 (四・一)
下蒲刈町	八七・〇 (一〇、〇〇〇)	〇・六 (〇・〇)	三・三・六 (五・五)	三・九 (三・六)	—	三・〇・〇 (五・四)	〇・二 (〇・〇)	三・八 (一・五)	三・〇・九 (五・〇)
蒲刈町	一、九〇・〇 (一〇、〇〇〇)	二・一 (一・五)	五・五・八 (三・七)	五・七・七 (三・〇)	〇・〇 (〇・〇)	五・六・八 (九・八)	〇・〇 (〇・〇)	六・三 (一・四)	六・四・三 (三・六)

単位…ha (％)

固定資産概要調書を基本に分類・作成した

宅地の面積は、郡下では少ない方で、府中、海田、坂などは一〇～二〇％台である。その他原野は府中、海田にはなく、熊野町には、かなり広く存在している。

土地利用の実態

土地利用の実態をみると、熊野の中心市街地、商業地は、二河川の上流に近い段丘崖下にある。風下で、南に開けた高燥の地にある。これを取りまいて一般住宅地や学校などが立地し、さらにその周辺の山麓の山林や雑種地に中小の工場が立地する。

熊野団地は中心市街地から約一キロ隔った西の山林丘陵地帯に開発された。したがって在来の市街地とは全く離れて、飛び地的に開発されている。この団地の中には中層住宅も含まれ、学校、商業施設も備わっている。これらの市街地の周辺には、田畑や在来の農家が残っているが、こうした地域をとり越えて、周辺の山麓で、家の少ない地域が、団地に開発されていることが多い。

こうした新しい団地と在来の中心市街地との間には、水田が多く残されている。この水田は、優良農地として、将来も保全されて行かねばならないが、旧在来の中心市街地と、団地間は、とくに水田の保全が考えられねばならない。

2 商業地域・住宅地域・工業地域

商業地域

商業地域は在来の中心市街地である中溝地区を中心に形成され、低次の日常中心や、その上位の近隣中心の商業地区を構成している。

近年、熊野団地の中、および入口附近に商店が集積している。また、黒瀬方面への県道の付け替えにより、そ



図6-3-8 町別商店数、従業員数、年間商品販売額の構成

昭和60年商業統計調査

の新しい県道に沿って、商業地域が形成されつつある。

熊野町の商業の実態は表6-3-23や、図6-3-8に示されているが、商店数は二五二で、小売が二三六、卸売が一六で、大半が小売である。従業者数も、小売が多く九三九人、卸売五七人で、合計九九六人、年間販売額も小売が多く、一一八億二五二六万円である。

これを安芸郡下の町村と比較すると、商店数では府中、海田、音戸、江田島に次いで五位であり、従業者数も四位、販売額は五位で、海田、広島方面へ顧客を吸収されている割合が高い。とくに高級買廻品では、こうした傾向が強い。このため、商業地域(商店街)も、旧来の中溝地区は、街区が長く、その中に商店以外に工・住・公共施設等が混在し、商店街自体のまとまりが悪い。強力な商業核がなく、賑わいを感じられない。街路幅がせまく、駐車場がないため、自動車を利用した客への配慮が欠けている。老朽化した商店が多い。照明・歩道・ベンチなど関連施設がない等の問題点が指摘されている。

一方団地の商店街は比較的新しいが、商店街としての統一性が不足している。駐車場、トイレ、休けい所などの施設が不足している等問題点が挙げられている。

こうした商業地域の改善策・発展策として商店街相互協同組織の強化

表6-3-23 商店数、従業員数、年間商品販売額（飲食店除く）

区 分	商 店 数			従 業 者 数			年 間 商 品 販 売 額		
	総 数	卸売業	小売業	総 数	卸売業	小売業	総 数	卸 売 業	小 売 業
広島県	五〇、四二二	一〇、八四七	三九、五七五	二五、三三四	九六、九九九	一五、三三五	一、一四三、八九五、六四四	九三、六三一、四三四	二四一、二六四、八〇
安芸郡	二、三四三	二三〇	二、〇一三	八、六六六	一、九四〇	六、七二六	二一、〇九四、八七七	二、一四一、〇五七	八、四三三、四四〇
府中町	四六八	五五	四一三	二、二二六	四七一	一、六五五	四、〇三九、〇〇九	一、五九、〇七七	二、五九、九三三
海田町	四五〇	七四	三七六	二、三三五	六三三	一、七〇三	七、二六七、四六六	四、五五、一三三	二、七三三、三三四
熊野町	二五三	六六	三八六	九六六	五五	九三九	一、三三七、九六六	一五、四四〇	一、八二、五五六
坂町	一七四	一八	一五六	八六六	四九	四三七	五、四二六、五七七	四、八六六、八二〇	五九、七四七
江田島町	二四四	一八	三六	九〇	一九	七三	一、五七三、三四	七三、六六一	八六〇、六七三
音戸町	二六七	一八	二四九	六六六	八五	五九一	三三、三三〇	二八、四三五	六四〇、八五
倉橋町	三三六	二二	二五	四四二	五九	三八三	三三、七三三	七九、四四五	二五、一七八
下蒲刈町	七三	三	七〇	一五四	一三	一四二	一二三、七七七	九、一三四	一三、六七三
蒲刈町	六	六	七三	一六二	一五	一四六	一六二、七四五	二四、九〇三	一三、八四二

単位：店、人、万円

昭和60年商業統計調査

や、個々の商店の近代化、消費者ニーズに沿った品揃え、店舗の集団化、歩道、駐車場の確保などが提言されている。

このように、中溝、団地とも、在来の商店街の周辺の県道に沿った交通の便利の良い地点に、大型店などが立

表 6—3—24 熊野町の団地

昭和55年 4 月現在

	団 地 名	面 積	計画戸数	建築戸数	推定人口 × 3.4	着 工
1	平 谷 台	1.45 ^{ha}	73 ^戸	57	194	46年
2	長 迫	1.00	47	39	133	50年
3	萩 迫	1.08	37	32	109	43年
4	滝 ガ 谷	6.35	133	90	306	46
5	土 筆 ガ 丘	1.43	50	35	119	43年
6	榊 山	1.79	79	61	207	46年
7	石 ガ 坪	1.85	98	71	241	46年
8	緑 翠 苑	4.03	203	113	384	46
9	葵	1.45	66	37	126	45
10	若 宮	0.79	42	16	54	47
11	桃 ガ 台	0.71	40	16	54	47
12	松 ガ 丘	2.15	57	27	92	47
13	新 宮 苑	4.08	159	119	405	47
14	土 岐 の 城	4.52	196	101	343	48
15	湖 翠 苑	2.65	119	60	204	46
16	皇 帝 ハイ ツ	13.94	396	240	816	49
17	花 丘	1.02	35	26	88	43
18	本 城	5.52	119	46	156	42
19	本 城 別 荘 地	4.50	140	0		43
20	県営熊野団地	58.00ha			4,031	

地し、在来の商店街(商業地域)と、新しいこうした商業地域が分離して、商業地域のスプロール現象が発生していることは問題である。

住宅地域

熊野町の住宅地域は、旧来の中溝地区

を中心に形成され、旧県道に沿って、主として商店が、その背後に住宅地域が形成された。その後、

昭和四十一年(一九六六)から熊野団地が造成され、昭和四十四年までに、木造四七七戸、簡易耐火三〇九戸、不燃構造六四戸、組立木造一〇戸、合計八六〇戸、約三三〇〇人の団地が形成された。

その後、図 6—3—9 にもあるように、本城別荘地や本城団地・

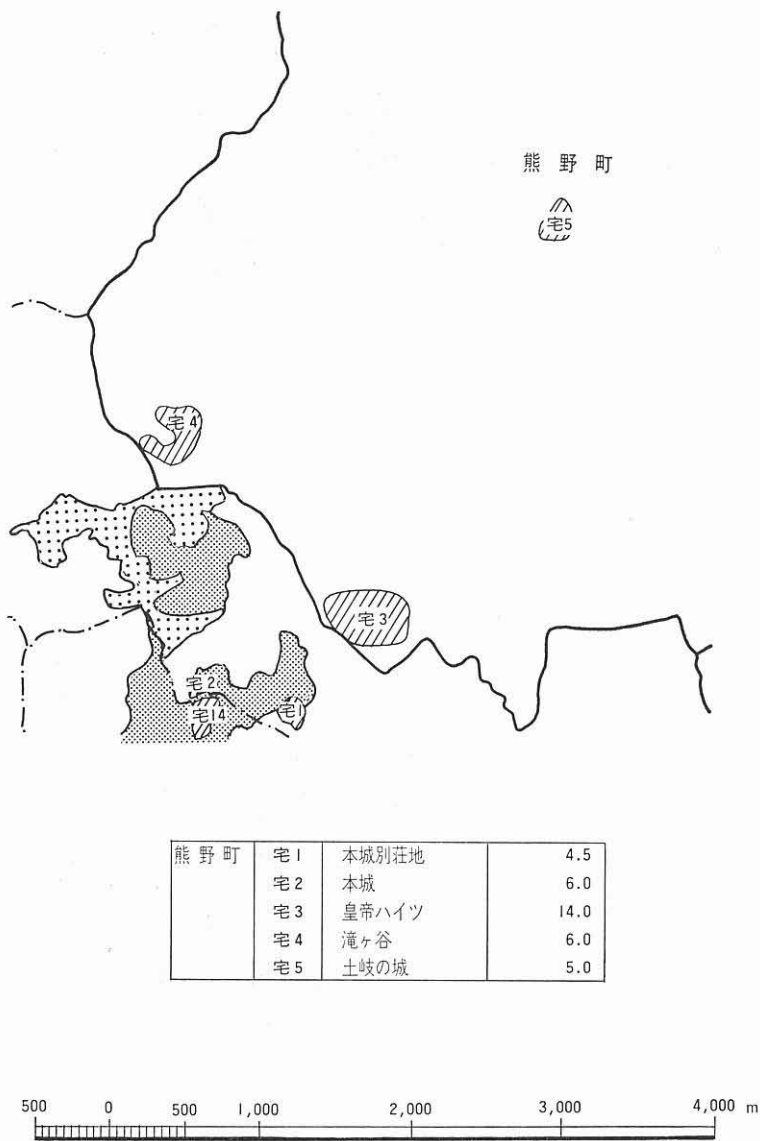


図 6—3—9 熊野町の住宅団地

皇帝ハイツ・滝ヶ谷・土岐の城などの団地が形成されているが、矢野峠の交通渋滞のため、団地形成は一頓座し、開発は停滞しているのが現状である。

現在までに形成された住宅団地は、表6—3—24のようで、中小の団地が多く、スプロールの開発が多い。十九の団地のうち、大半が一〇〇戸以下である。こうした小規模な団地では上下水道、とくに下水道や、その

他の生活環境施設の整備が十分とは行かず、その上に、スプロールの市街地形成がみられるので、都市計画区域を設定し、用途地域の指定を行なうて、良好な住宅地・市街地形成を、目指している。

工業地域

熊野町には、工場はあまり立地せず、在来の筆作りは、各民家や市街地内にあって、小規模なものが多い。しかし、広島方面から進出した中小の鉄鋼、機械などの工場が、周辺に立地しており、重地や障界など低地の水田地帯や、長迫、火原など団地の周辺に立地している。現在、それほど工業地域は多くないので、用途混合などの問題は発生していないが、将来は都市計画区域で、用途地域を指定しておく必要がある。う。

3 地域の変貌

昭和二十四年の地形図

熊野町の地域の変貌を、古い地形図を頼りにみよう。戦前の地形図は、熊野町の箇所が呉近傍の要塞地帯に入っているため、空白となっている。そのため、昭和二十四年（一九四九）の地形図をみると、戦前の様相を類推することができる。

それによると、熊野町は盆地の中央にあり、矢野と北の瀬野方面から熊野へ通じる道路があり、熊野町から東

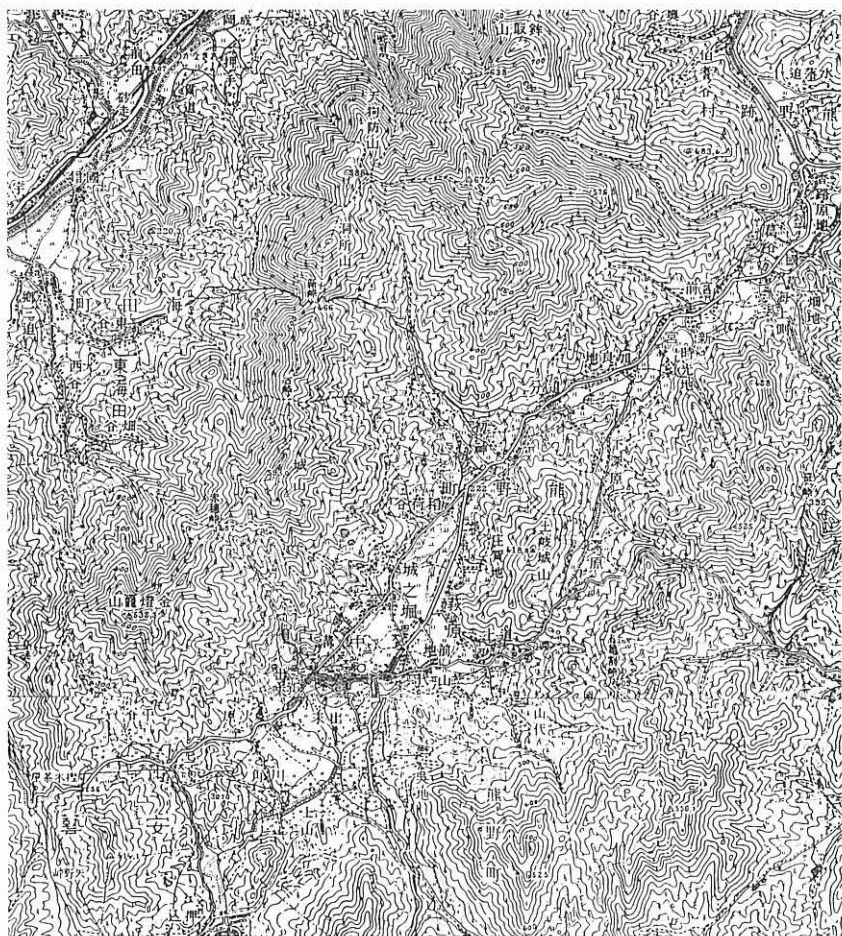


図6-3-10 熊野町 昭和24年



図6—3—11 熊野町 昭和37年

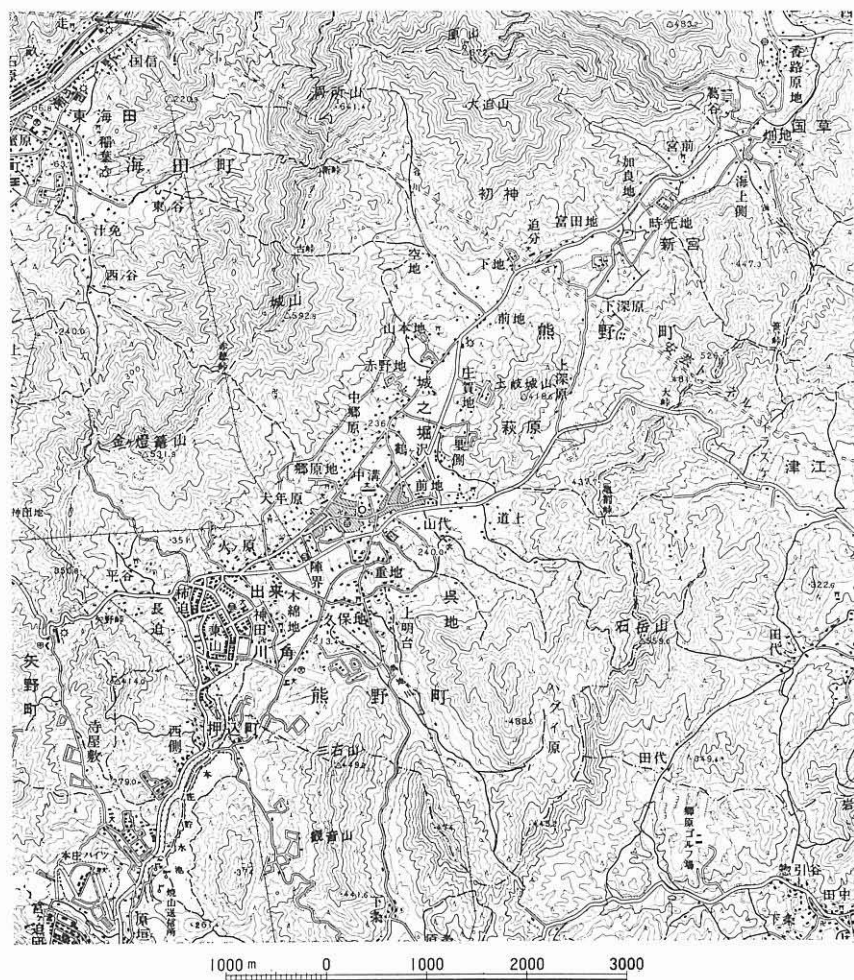


図6-3-12 熊野町 昭和54年

方の黒瀬へ至るルートと、南の呉地、焼山へ至るルートが開けていたことがわかる。

中心市街地は段丘崖下に南面し、中溝地区の前地、山代から出来まで市街地が広がっている。盆地の大半は水田で、しかも乾田であり、穀倉地帯の一環をなしていた。川角地区の熊野団地附近は丘陵で、山林である。

昭和三七年の地形図

次に、昭和三十七年（一九六二）の地形図をみよう。この頃も、熊野町の様相はあまり変化していない。交通体系のパターンも変化なく、中心市街地もあまり変化は見られない。

ただ、中心市街地の末端である山代、前地地区が、道路沿いに、若干の集落の発達が見られる。また西端の火原地区および平谷地区が、県道沿いにやはり同様に集落の発達が見られる。

また城之堀附近では、北東から南西に走る県道と城之堀の南側を山麓に沿って走る県道との間に新しい道路が二本設けられ、多少の集落の発達がみられる。

昭和五四年の地形図

さらに、昭和五十四年（一九七九）の地形図をみると、昭和四十三年ごろからの都市化によって、かなり市街地の成長がみられる。中心市街地の西南の熊野団地が大きく成長し、中溝の中心市街地の南側に、迂回する形で、新しい県道が新設された。また城之堀の東側の道路も拡張され、町の主要交通流は、この新設された道路を通ることになった。また集落の発達も、この道路に沿って行なわれている。

三 交 通

道路の概要

熊野町は鉄道はなく、専ら道路交通に依存している。町内の幹線道路は、町内をほぼ東西に貫く主要地方道（県道）矢野・安浦線と、南北に走る県道瀬野・呉線で、国道はない。このほか県道津

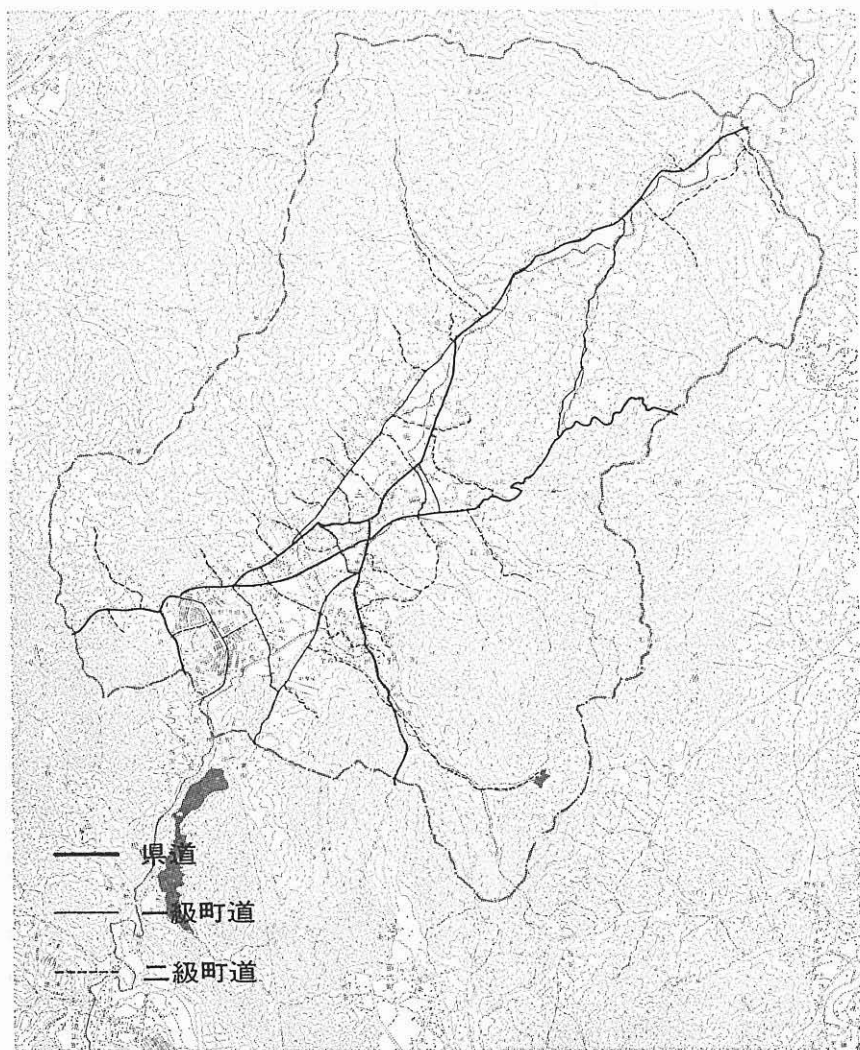


図6—3—13 道路現況図

表 6—3—25 道 路

(昭和52年 3 月31日)

区 分	路 線 名	延 長 (m)	舗装率 (%)	備 考
県 道	矢野・安浦線 瀬野・呉線 津江・八本松線 平谷・呉線			
町 道	4 0 8 路 線	125,423	52.3	

表 6—3—26 車種別自動車登録台数

(各年 4 月 1 日現在)

年次	総 数	乗用車	バス	貨物車	三輪車	軽自動車	二輪車	原動機付自転車	特殊用途車	農業用特殊自動車	その他
56	11,105	4,734	15	867	6	1,932	138	3,325	45	10	33
57	11,801	4,852	19	817	5	2,167	174	3,670	52	10	35
58	12,545	4,942	19	787	5	2,390	212	4,092	49	14	35
59	13,354	5,138	21	771	4	2,635	246	4,405	55	43	36

県税事務所・町税務課

道 路

(昭和60年 4 月 1 日現在)

県 道				国 道			
延長km	面積 m ²	改良済km	舗装率%	延長km	面積 m ²	改良済km	舗装率%
10.3	10,100	8.6	100.0	—	—	—	—
5.2	32,500	1.5	100.0	5.0	90,700	4.2	100.0
17.2	129,406	13.7	100.0	—	—	—	—
0.7	15,671	0.7	100.0	7.1	112,087	7.1	100.0
30.0	206,517	21.2	100.0	—	—	—	—
21.9	180,904	19.0	97.3	—	—	—	—
48.8	266,871	30.6	88.4	—	—	—	—
14.2	75,656	10.8	100.0	—	—	—	—
18.6	95,551	14.7	95.4	—	—	—	—

町道路台帳、県土木建築事務所、国道事務所

江・八本松線と、県道平谷・呉線がある。

こうした道路によって広島、海田、矢野方面へは矢野・安浦線、呉方面へは、呉・平谷線および瀬野・呉線で結ばれている。矢野・安浦線と瀬野・呉線は拡幅工事が行われており、将来、全線二車線となる予定である。

このほか、住区幹線道路、町内幹線道路があり、町内の主要道路となっている。さらに住宅地内道路として町内幹線と住宅を結ぶ道路、いわゆる生活道路がある。これらは町道で、総延長は一二万五四二三メートルもあり、舗装率は五二・三%と水準がなお低い。

こうした道路の状況を、郡内の他町村と比較すると、表6—3—27のようになり、町道はかなり改良されている。町道の延長が郡内一で、拡幅その他の整備がこれからの大きな課題となる。県道もかなり改良されているが、国道がないのが問題である。

自動車交通

熊野町の自動車数は、表6—3—26のようで、昭和五十六年（一九八一）には総数四七三四台、昭和五十九年には一万三三四台で、そのうち乗用車は五一三八

第三節 地域の変容

表6—3—27

区 分	町 道				農 道	林 道
	延 長 km	面 積 m ²	改良済km	舗装率%	延 長 km	延 長 km
府 中 町	86.8	409,115	75.3	92.5	2.7	8.1
海 田 町	81.8	376,571	46.0	87.6	25.6	3.5
熊 野 町	153.7	687,086	61.8	91.6	33.5	19.4
坂 町	65.8	251,970	22.4	86.8	75.7	—
江 田 島 町	75.5	338,523	24.7	86.6	103.3	8.3
音 戸 町	69.9	206,518	9.7	82.5	5.4	8.2
倉 橋 町	56.6	215,856	14.3	53.3	45.5	37.0
下 蒲 刈 町	107.0	349,290	11.5	55.5	4.5	2.7
蒲 刈 町	91.5	421,532	20.2	96.9	39.0	14.4

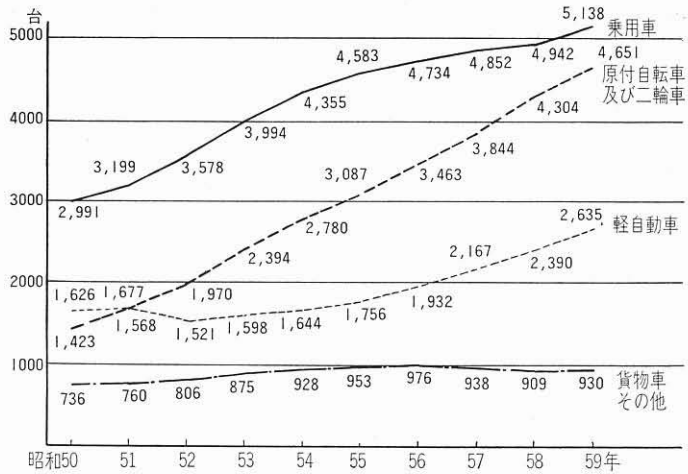


図6-3-14 自動車登録台数

表6-3-28 広島市周辺の1世帯当り乗用車所有状況

市 町 名	台 数	市 町 名	台 数
熊 野 町	0.74 台	廿 日 市 町	0.65 台
府 中 町	0.60	大 野 町	0.70
海 田 町	0.64	広 島 市	0.55
坂 町	0.55	呉 市	0.47
五 日 市 町	0.64	県 平 均	0.61

昭和54年ひろしまの交通統計

(昭和54年普通車・軽四輪車数)
55.3月末世帯数

台である。このほか軽自動車、二六三五台、原付自転車四、四〇五台などが多いが、経年別では、道路交通渋滞の状況を反映して、乗用車の増加率は減少し、代って原付自転車や自転車、軽自動車など小廻りの効く車種が増加している。

熊野町の一世帯当たり自動車所有状況は表6-3-28のようで、県平均や広島市周辺町に比較すると高い。これは公共交通機関がバスのみであること、および自家用車の所有率の高い中年層の人口が多

いこと、また、自動車関係企業の従業者が多いことなどが挙げられる。

自動車交通量をみると、瀬野、呉線の萩原で約四八〇〇台、呉地で約一四〇〇台であるが、広島市や呉市との境界部では、一万三〇〇〇台以上が朝夕に集中し、混雑度はかなり高くなっている。

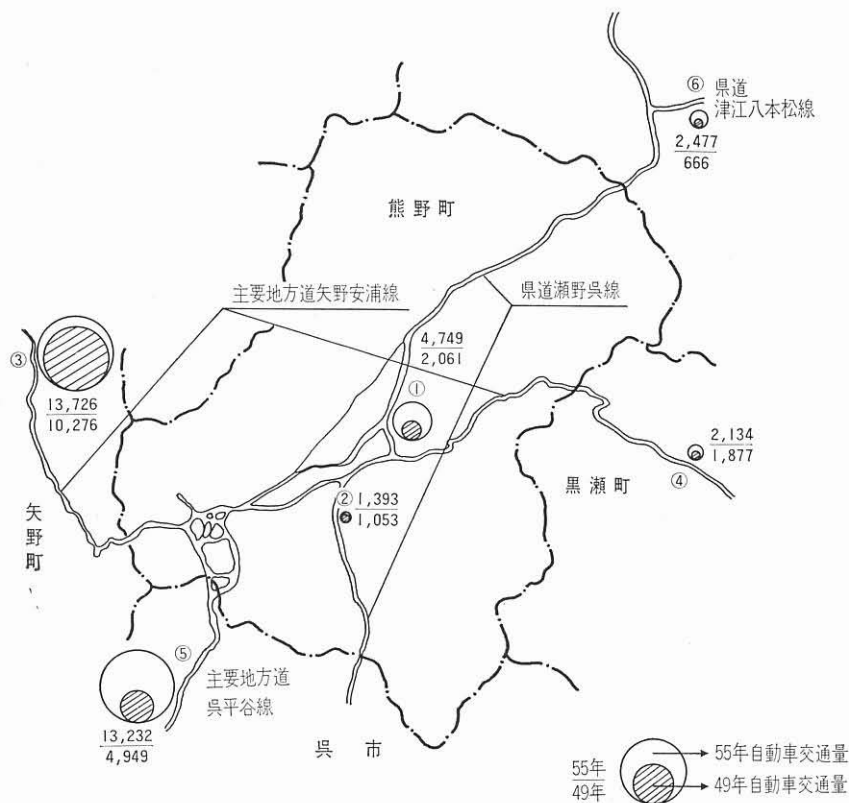


図6-3-15 熊野町関連の道路網および自動車交通量

昭和四十九年から五十五年間の増加率は二倍以上となっており、矢野町境は飽和状態となっている。これが瀬野廻りや押込方面へ流れているようで、その二地点の交通量が急増している。

バス交通

熊野町を走る
バス交通網

は、広島市方面へ矢野・海田を経てバスセンターに至るルートと、阿戸・瀬野川・海田を経てバスセンターに至るルートがある。これは広島電鉄が運行している。呉市方面へは、熊野団地と呉駅前を結ぶ呉市営バ

表 6—3—29 自動車交通量

路 線 名	観 測 地 点	地点 番号	自 動 車 通 行 量			55/49 (倍)
			49 年	52 年	55 年	
県 道 瀬 野 呉 線	熊野町萩原庄賀地	①	2,061台	3,389台	4,794台	2.33
	熊野町呉地	②	1,053	1,549	1,393	1.32
主要地方道 矢野安浦線	矢野町花押	③	10,276	11,577	13,726	1.34
	黒瀬町津江	④	1,877	2,152	2,134	1.14
主要地方道呉平谷線	呉市押込本庄	⑤	4,949	5,303	13,232	2.67
県道津江八本松線	広島市阿戸町	⑥	666	1,483	2,477	3.72

「道路交通情報調査」昭和55年調査日は昭和55年10月8日

表 6—3—30 バス乗降客数の推移

(千人)

年次 \ 路線	広島電鉄熊野線	呉市営バス 焼山 熊野苗代線
50	5,102	4,183
51	4,605	4,266
52	4,824	4,120
53	4,433	4,150
54	4,194	3,754

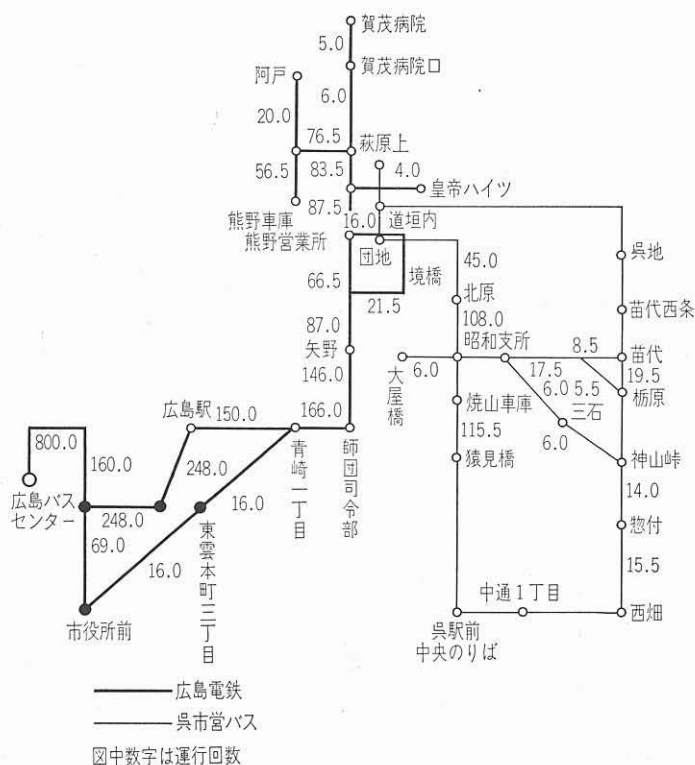


図6—3—16 バス運行系統図

スで、焼山、熊野苗代線である。さらに熊野から黒瀬（賀茂病院）に至る広島電鉄バス路線がある。広島電鉄熊野線は約九四往復、呉市営バスは、昭和支所経由が約三一往復、苗代経由が約九往復である。黒瀬の賀茂病院までは、六往復である。しかし、運行時間が長くなり、交通渋滞も甚だしいので、乗降客が漸減しており、バス交通運行の正常化が望まれている。

表6—3—31 地域指定一覧表（昭和61年4月1日現在）

○は全域、●は一部地域を表わす

区 分	過疎地域	離島振興地	半島振興地	農村地域工業導入促進法による農村地域	農業振興地	国際観光モデル地域	都市計画区	広域市町村圏
府中町							○	(広)
海田町							○	(広)
熊野町				○	○		●	(広)
坂田町							○	(広)
江島町			○	○	○	○	●	(江)
音戸町			○	○	○			(呉)
倉橋町	○	●	○	○	○			(呉)
下蒲刈町		○		○	○			(呉)
蒲刈町	○	○		○	○			(呉)

広域市町村圏の区域名は次のとおりである。

(広)…広島広域市町村圏

(江)…江能広域市町村圏

(呉)…呉広域市町村圏

四 熊野町の将来

総合基本計画

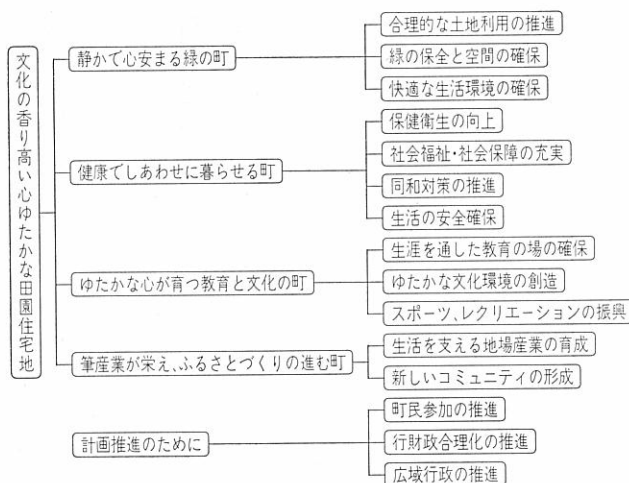
熊野町は総合基本計画を、昭和五十五年三月に策定しているが、それによると、計画の目標年次を、昭和六十五年（一九九〇）とし、五十五年から一〇か年の計画としている。

昭和六十五年の目標人口を二万八〇〇〇人としている。

昭和五十五年当時の人口が二万四二五二人、六十年の人口が二万五三四六人であるから、かなり妥当な線と言えるのではなからうか。

熊野町も含まれた広域的な開発計画は、表6—3—31にみられるように、農村地域工業導入促進法に指定された農業地域であり、広い優良な農地を有しているので、農業振興地域にも指定されている。さらに、広島広域都市圏の一環として住宅地、工場などが進出してきているので、一部、都市計画地域にも指定されている。

表 6-3-32



熊野町の将来

また広域市町村圏の区域は、当然のことながら、広島広域市町村圏に含まれている。こうした広域的観点から熊野町の将来を考えるならば、広島広域都市圏の一環として、広島市の影響を受けながら、近郊町として発展していく方向となろう。

その際、広島と東広島、呉のちょうど中点にあり、広島とそれらの都市を結ぶ中間地帯となっている。このよ

うなメリットを、将来も生かして行くことが必要であろう。しかし、現実には、国道も通っておらず、いわば、一種のエアポケット、真空地帯ともなっている。

しかし、将来は東広島テクノポリスや、呉方面へのバイパス、広規格の道路を計画し、中間都市的發展を、考えていく必要がある。

また、エアポケットとして、急激な広島市の都市化の影響を受けなかったがために、筆作りなどの地場産業が残ったといえる。広島へ通勤、通学が容易であれば、農業や、零細な地場産業は衰退したり、消滅しかねない事態が起り得るからである。

将来は、このように広島と東広島テクノの中間地帯として、優良な筆作りという地場産業を生かしながら、独自の、個性を持った町として発展していくことが望ましい。

目標

そのための町独自の発展方向として、表6―3―32のような目標を掲げている。その目標のように、緑と良好な環境を生かした、田園住宅地、それは公害を出さない地場産業も含めた住宅地として発展することであろう。

土地利用計画

そのためには、従来の都市化にみられるような、自然発生的な、無秩序なスプロールの都市化であってはならない。それ故に、強力な土地利用計画が必要である。幸いにして熊野町も都市計画区域に指定され、計画的開発がなされるようになった。このように、土地利用計画がもつとも重要と考えられる。

熊野町の土地利用構想は、図6―3―17のようで、周囲を山林に囲まれ、さらに、かなりまとまった優良農地があり、田園が多く残される計画となっている。

中溝地区や団地を中心に、商店街や公共施設が集中し、それを取りまいて、ゆったりした緑と太陽にあふれた住宅地や工場が存在する。さらには広域的なレクリエーション施設なども立地してもよいのではなからうか。

こうした田園都市を形成するためには、前述したように、アクセスの改良に努め、広島、呉、東広島とスムーに結ばれるよう、広域的な道路整備が必要であるが、熊野町内においても、道路の整備が必要である。

主要幹線道路は歩車道が分離し、街路樹や植込みのある街路が必要であろう。さらに、中溝地区や団地地区など中心商業地域は、緑地帯ももったブルーバールなどの構想もあってよいのではなからうか。

ともかく、筆作りなど地場産業も生かした田園文化住宅都市構想は、テクノポリスの理想にも合致した考えで、特にテクノポリスを具現する都市である。

第三節 地域の変容

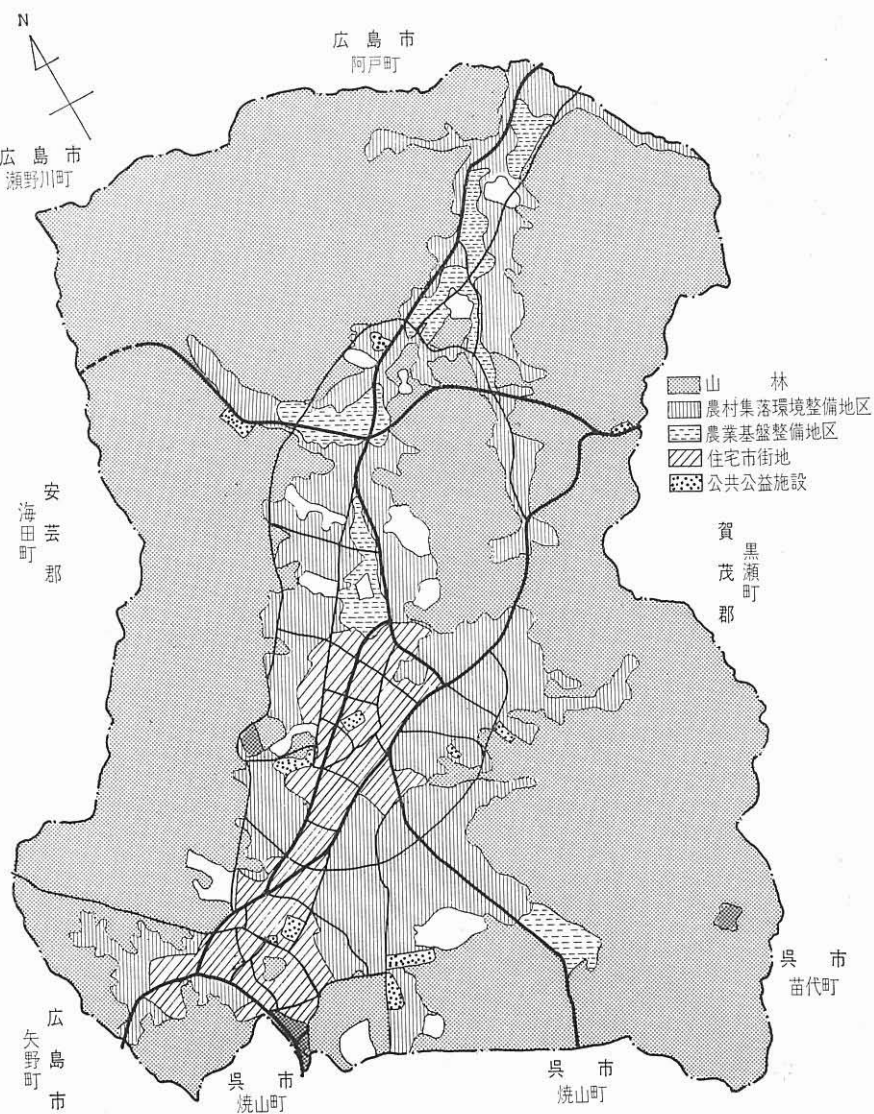


図6-3-17 土地利用構想図

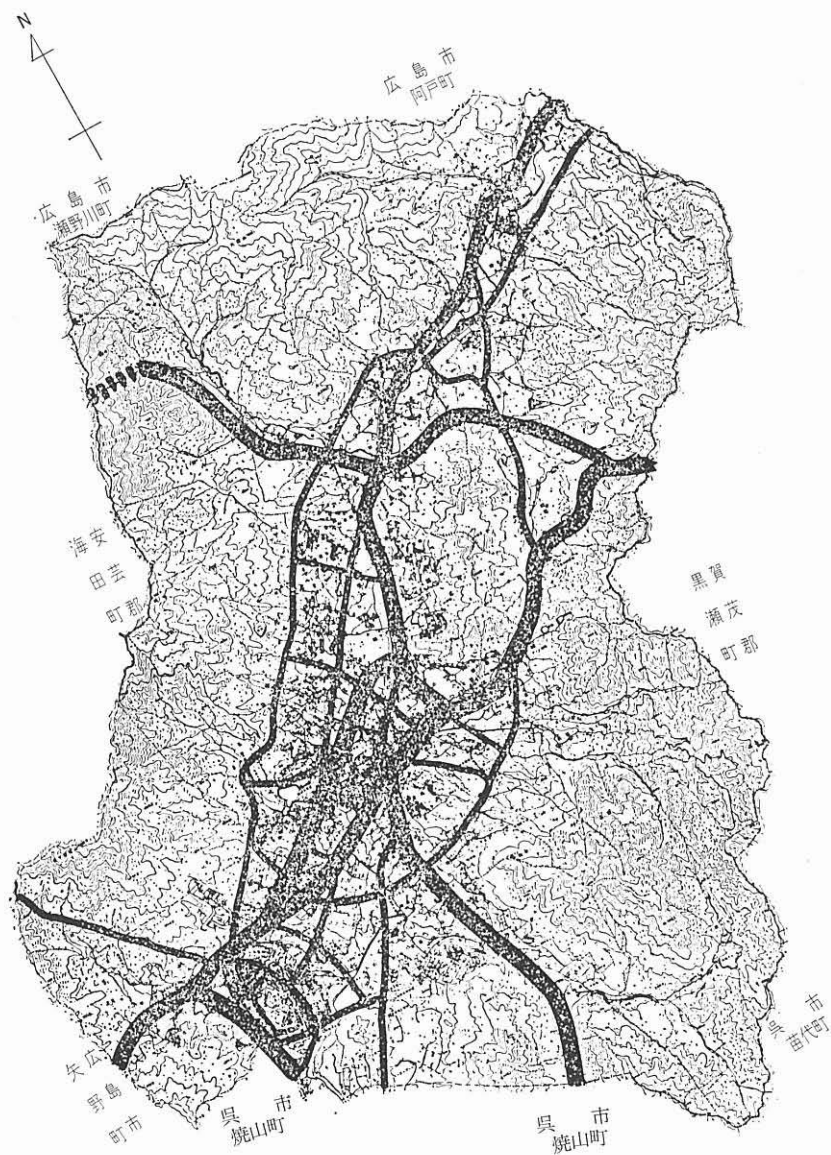


図6—3—18 主要幹線道路網計画図

表 6—3—16 職業（大分類）別就業者数

職 業	昭和25年		昭和30年		昭和35年		昭和40年	
	総数	(うち)男	総数	(うち)男	総数	(うち)男	総数	(うち)男
総 数	4,430	2,503	4,831	2,604	5,132	2,678	4,945	2,808
専門的技術的職業従事者	104	72	106	80	93	59	124	72
管理的職業従事者	11	11	35	33	29	29	26	26
事務従事者	139	115	141	104	197	136	359	194
販売従事者	319	208	362	235	370	210	410	215
農林漁業従事者	2,240	1,234	1,787	963	1,439	717	1,348	552
採鉱採石従事者	4	4	1	1	11	5	3	3
運輸通信従事者	31	31	56	56	121	107	240	217
技能生産工程従事者	1,528	800	2,259	1,098	2,780	1,375	2,323	1,471
および単純労働者								
保安サービス従事者	1,528	800					27	27
サービス職業従事者	54	28	84	34	92	40	83	31
分 類 不 能	0	0	0	0	0	—	2	1

国勢調査

らに一〇年後の昭和四十五年になると、大きな変化をみせ、産業別就業者の総数が増加するとともに、第一次はますます減少し、一〇〇六人、全体の一三・五％とさらに大きく低下した。一方第二次産業人口は三九五〇人で、全体の五三・二％まで上昇した。第三次も同様な傾向で二四六八人、全体の三三・二％と急増している。

そして五十年以降、農業人口はますます減り、二次主導型で、三次がそれに付加する構造となった。

表 6—3—16 の職業別構成をみても、同様な傾向がみられるが、とくに、専門的・管理的・事務従業者や販売従事者、技能生産工程従事者の増加がみうけられる。

4 人口移動

転出入人口

次に人口移動のうち、転出入についてみよう。昭和五十九年のデータによる

者数及び推計人口

(昭和59年4月～昭和60年3月)

補 償 率			出 生	死 亡	自然増減 (B)	外国人増減 (C)	増減総数 (A+B+C)	推計人口 (昭和60年 4月1日)
総 数	県 内	県 外						
96.0	100.0	91.3	34,076	18,316	15,760	157	9,291	2,792,601
95.0	98.5	91.1	25,215	12,047	13,168	159	7,251	2,005,987
98.8	103.5	92.0	8,861	6,269	2,592	△2	2,040	786,614
90.7	88.5	93.3	2,081	1,103	978	△2	△313	167,025
87.7	91.4	82.1	783	212	571	△4	29	47,588
88.0	77.5	106.1	470	133	337	△2	19	30,112
95.5	103.0	78.4	239	147	92	△4	36	24,919
96.7	100.9	89.2	113	96	17	2	2	12,973
96.5	82.4	100.9	154	148	6	3	△117	15,902
96.4	103.5	79.3	181	156	25	2	△1	17,602
75.9	76.9	72.6	90	134	△44	1	△152	9,986
52.9	57.1	42.9	23	30	△7	—	△63	3,884
74.2	75.9	68.3	28	47	△19	—	△66	4,059

と、広島県全体の転入者数は一五万九千九百七十五人、転出者数は一六万六千六百〇一人で、差引き六千六百六十六人の社会減である。

安芸郡では、転入一万二千五百八十八人で、全体の七・八％である。転出は一万三千八百七十七人で、差引き一二八十九人の社会減である。転出者数の全体に占める比率は八・三％である。補償率からみると、広島県は九六・〇％であるが、安芸郡は九〇・七％で、県平均より流出が多いようである。これは自動車・鉄鋼・機械など不況を反映しているのであらうか。

熊野町は安芸郡下では府中・江田島・海田町に次いで、転入一一一人、転出は同様に、府中・江田島・海田町に次いで一一六三人で、差引き五人の転出超、社会減である。したがって、補償率は九五・五％で、安芸郡の九〇・七％よりはよく、郡内では四位である。

転出先は、県内では広島市が圧倒的に多く、三

表 6—3—17 市区町村別移動

(単位：人、%)

市 区 町 村	転 入			転 出			社会増減 (A)
	総 数	県 内	県 外	総 数	県 内	県 外	
昭和 59 年 度	159,975	90,104	69,871	166,601	90,104	76,497	△6,626
市 計	115,464	62,756	52,708	121,540	63,689	57,851	△6,076
郡 計	44,511	27,348	17,163	45,061	26,415	18,646	△550
安 芸 郡	12,558	6,556	6,002	13,847	7,411	6,436	△1,289
府 中 町	3,835	2,404	1,431	4,373	2,630	1,743	△538
海 田 町	2,318	1,295	1,023	2,634	1,670	964	△316
熊 野 町	1,111	835	276	1,163	811	352	△52
坂 町	503	338	165	520	335	185	△17
江 田 島 町	3,510	703	2,807	3,636	853	2,783	△126
音 戸 町	740	560	180	768	541	227	△28
倉 橋 町	343	266	77	452	346	106	△109
下 蒲 刈 町	63	48	15	119	84	35	△56
蒲 刈 町	135	107	28	182	141	41	△47

注 1 補償率：転出者数に対する転入者数の比率

2 広島市の（ ）は区間移動を除いた値である。

九六人あり、次いで呉市一五三人、府中町四五人、海田町三七人、江田島二四人、五日市町二三人などで、五日市は広島市として考えた方がよろう。

広島市内では安芸区一〇人、南区一〇七人などが多く、東区は意外に少なく四〇人で、中区の方が五一人と多い。

県外では転出先が多いのは、山口六二人、大阪府二八人、東京都二八人と同数で、神奈川二五、兵庫二二人など、首都圏・近畿圏との交流が深く、岡山二四人、島根は一〇人と意外に少ない。愛知県は二人とこれも意外に少なく、福岡は一人、九州の方が交流が深い。

転入ではやはり広島市との関係がもっとも深く、三三四名で、次いで呉市の二六三名、転出よりも転入の方が多いのが目立つ。あと、東広島三人、海田町六二人、府中町は意外に少なく一八人である。五日市町は二人で、転入は少ない。